

ありしは疑ふべきにあらず。

松下村塾の開かれしより三年を出でずして、松陰は討幕の義舉破れて、再び幽囚の身となり、終に江戸に送られて命を終りぬ。「親を思ふ」の哀歌に接したる瀧子の悲嘆如何なりけん。

松陰が義に死し國に殉したるは、瀧子或は慰むるところあらん。されど、瀧子はこれより先に四子を失ひたる上に、今またかゝる不幸にあひ、夫は松陰の連累によりて贅居の身となれり。尋常の婦人なりせば、哀傷の極、心を喪ふにも至らんを、瀧子は操持ますく固く、よく家を守りて老年に及びぬ。實に健氣の至りなり。

明治二十三年八月、瀧子病にかゝり八十四歳にて歿りぬ。これより先、瀧子の寫真太政大臣三條公の手を経て長くも 皇太后宮 皇后宮兩陛下の清覽に入りし

が、この時 皇后宮陛下より畏き吊詞に祭料をよへ添へて賜はりき。こよなき光榮といふべし。

品性純潔にして仁恕の心に富み、能く姑に事へ、夫を輔け、善く子女を教養し、勞に耐へ變に處して、始終を全ふせるこの賢母良妻の名は、實に婦人の模範として、松陰の名と共に不朽なるべし。徳富蘇峰氏その著書「吉田松陰」に於いて、瀧子につきて「昔て彼女の寛真を見るに、豐頤、細目。健全溫厚の風籟然として掩ふべからざるものあり。」といへり。或はその面目を髣髴するに足らんか。

(完)

ローランド夫人

鄭越生抄譯

死屍途に充ち、流血杵を漂はず、悽愴といひ、慘鼻

といふ未だし、腥風ヴェルサイユ宮を掠め、君王ギロ



チンに消ゆ、悲劇といひ、修羅の巷といふ未だし、實に恐ろしきは佛蘭西革命の事件なり、かくゆゝし大慘劇の中に立

ちて従容自若、縦横に馳驅し折衝したる一婦人あり

婦人名はシエーン マノン フイリツボンと呼ぶ、後

世革命史の叢りに一點の紅を綴りてローランド夫人と

稱せらるゝもの即ち是なり。

夫人は一千七百五十四年巴里に生る、その門地尊か

らずといへども、ざりとて餘り卑賤なりとにわらず、夫人の父は勤勉なる彫刻師にして、母は氣品高く且つ誠に愛嬌ある婦人なり、夫人幼にして尋常に卓越し、

未だ四歳に達せずして既に文字を解す、夫人の幼稚教育の方法は唯夫人に供給するに、充分なる書物を以てするを要せしのみ、夫人熱心にして甚だ勤勉故に其手にして一たび書物に觸れんか、必ず讀了せずんば止まざるなり、夫人機智にして伶俐故に一たび讀下す蘊奥を叩きて得ざるなし、而して其書物に熱心なる、如何なる方法を以ても夫人の注意を書物より奪ふこと能はず然れども夫人天性花を愛好す故に夫人の眼を書物より轉せしめんには、唯花を示すの一法あるのみ、實に書物と花とは夫人一生を通じての愛情物たりしなり。

かくて夫人の父母は、夫人に與ふるに其財産の許す限り、善良なる教育を以てせんとし、夙に、習字、地

理學、音樂、舞蹈、繪畫等の教科を受けしめたり、當時夫人が如何に喜んで此等の學科を學びたるか夫人の教師亦如何に喜んでそを夫人に教授したるか而して夫人が如何に驚くべき進歩をなしたるかは、今云ふを要せず蓋し自ら讀者の了解するに難からざることなるべければなり。

夫人の殊に愛讀せられたるはタツソー、トムソン、フエチロン及びブルタークの著書なり、就中最も深き感化を興へしはブルタークの著書なるべし後年夫人が懷抱せし感情及び政見は多く此書に胚胎したらんが如し

斯くの如く精神上非常の天才を有する夫人は、身體上亦諸種の美點を有したり、夫人長身にして細腰、瀟灑にして端麗、舉止甚だ閑雅にして而も無限の愛嬌を有す、所謂玲瓏玉の如しとは夫人のとにてあるなり、

所謂胎蕩春風の如しとは、また誠に夫人の謂なり、一たび夫人に接す、恍惚人をして離るゝに忍びざらしめ再び夫人を見る、濶容人をして忘るゝ能はざらしむ。

(以下次號)



文苑

システイーとドミノー

安井てつ子

英吉利の或市に、三階造りの大層立派な家がありました。其家には、廣い奇麗な庭がありまして、梅だの林檎だの、其外、色々の木が植えてあります。

此家は、システイーといふ男兒の家です。

或夏のことでしたが、餘り暑いので、システイーの